

Title	国語教科書の中の「女ことば」： 小学1年生用教科書(上巻)を資料として
Sub Title	
Author	村田, 年(Murata, Minori)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2018
Jtitle	日本語と日本語教育 No.46 (2018. 3) ,p.45- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20180300-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国語教科書の中の「女ことば」

—小学1年生用教科書（上巻）を資料として—

村 田 年

1. はじめに

1990年代半ばに放送大学の教材作成を行った際に、会話文の中で男女の性差を扱ったことがある¹⁾。その折に、私たちが認識として持っている「女ことば」と、実際に日常生活で使っている「女ことば」には違いがあり、それをどのように日本語教育の現場で扱うかということについて、異なる世代間の日本語教師、編集関係者の間で議論になったことを思い出す。当時から既に20年以上が経ち、性別語や役割語の研究も大きく進んでいる。今年、院生の一人が日本語の「女ことば」の音声上の問題について研究することを希望したことをきっかけに、改めて「女ことば」について考える機会を得た。

中村(2012)は、その著『女ことばと日本語』の中で、「女ことばがある」と信じられているのは、実際に日本女性が男性と異なる言葉遣いをしているという意味の「ある」ではなく、言語イデオロギーとして、言説によって歴史的に形成されてきたものと述べている。つまり、どの時代にも女性の言語行為について語る言説が存在することが可能で、それを普及させるような政治経済状況を背景に、「女ことば」という理念が作られてきたのだ、ということ、を、時代ごとにその経緯を浮き彫りにしている。

「女ことば」、「男ことば」と呼ばれる性別語は、社会的に身に付ける役割語であることを考えれば、その社会に生まれ、育ち、長年、その言語である日本語を使って生活をしている母語話者にとって、自分が用いている言葉遣いに、実は性別語の規範が無意識に入り込んでいるということに気づ

く機会は少ない。その規範との接触は、家庭から始まると考えられ、公的には義務教育がそのスタート地点だと言えよう。そこで、筆者は、学校教育における国語を、規範としての日本語と捉え、母語話者がそこで「女ことば」、広くは性別語にどのように接し始めるのかに関心を持った。

本稿では、初等教育の国語教科書、具体的には文部科学省検定済教科書である小学一年生対象の教科書（上巻）を資料として、「女ことば」をはじめとする性別語がその中でどのように現れるのかを見ていくことにした。

2. 調査目的

本稿の目的は、母語話者にとって、規範的な位置づけとなる「学校教育における国語」の最初の段階、すなわち初等教育一年目の小学校の国語教科書で、「女ことば」を中心に広い意味で性別語がどのように提示されているのかを見ることである。

(1) 指標としての「女ことば」

まず、「女ことば」とは何かということについて、辞典の記述を見てみたい。国語学会編『国語学辞典』（1980）を見ると、「語彙の位相」の様相論（社会を背景とする狭義の位相論）について、「性による差—男性語と女性語—」として、以下の記述がある。

男性の用いるすべてのことばを男性語といい、女性の用いるすべてのことばを女性語という。狭義には その差の顕著なものについていう。女性語は婦人語ともいう。現代語において、人称代名詞一人称で「ほく・おれ・わし」は男性が使い、「あたし、あたくし」は女性が使う。普通、逆は使わない。また、終助詞「ぜ・ぞ・な」は男性が使い、「よ・ね・わ・かしら」は女性が使う。感動詞「ほう・おい・なあ」は男性が使い、「あら・まあ・ちょいと」は女性が使う。敬語において「ませ・まし」は普通、女性が使い、手紙においてあて名の脇付けに「(御) 侍史・机下・膝下」は男性が、「御前に・みもとへ」は女性が使うのがふつうである。このような事例は数えあげればきりが無い。日本語は世界の言語の中でも、男性語と女性語の相違が特に著しいといわれる。

『国語学辞典』（1980, p. 350）

この辞典の刊行は1980年なので、約40年前の記述になる。感動詞や敬語の一部、手紙の宛名の脇付けに関する記述には、時代を感じさせるものもあるが、それ以外は、現在でも日本語の性差を表す特徴だと言える。

次に、役割語を扱った最新辞典である金水編『〈役割語〉小辞典』(2014)を見ると、「はしがき」の中で、役割語を支えるステレオタイプの基盤として、6つの分類の観点(性差、年齢・世代、職業・階層、地域、時代、人間以外)が示され、その一つである性差について、以下の記述がある。少し長いが全文を引用する。

基本的な性差を反映した役割語として、〈男ことば〉〈女ことば〉というラベルを立てておきます。〈男ことば〉の語彙には、「ほく」「おれ」「～ぞ」「～ぜ」「おい」「止めろ」などの命令形が含まれます。〈女ことば〉の語彙には「あたし」「～わ」「～もの」「あら」「まあ」などが含まれます。〈男ことば〉は、江戸時代の江戸の〈町人ことば〉と、明治時代の〈書生ことば〉と言われる学生言葉が基盤となっています。〈男ことば〉は近代日本語の標準語の発達とともに形成されてきたと言っていいでしょう。一方〈女ことば〉は、江戸時代の「あそばせ言葉」と呼ばれる丁寧な話し方を基盤としつつ、明治時代の「女学生言葉」(あるいは「てよだわ言葉」)の要素が多く取り入れられています。明治時代以降の近代小説をはじめとする近代的なフィクションの中で、女性キャラクターを描写するために大いに発達しました。

さて、〈男ことば〉の基盤の一つである〈書生ことば〉には、「ほく」「きみ」「吾輩」「諸君」「失敬」「～たまえなどの語彙が含まれていました。「ほく」は〈男ことば〉の一般的な代名詞となっただけでなく、〈少年語〉の代表的な一人称代名詞にもなっています。「～たまえ」は今日では地位や権力を持った男性が用いる〈上司語〉の語彙が流れ込んでいます。

〈女ことば〉の基盤となった女学生ことばのうち、「～てよ」「～こと」「～です(ます)わ」などは、今日日常会話の中ではあまり聞かれなくなりました。これらは〈お嬢様ことば〉〈奥様ことば〉として認識される場合が多いでしょう。「～ぞ(あ)ます」も〈奥様ことば〉の一つです。トランスジェンダーな人々の言葉を指し示す〈おネエことば〉もここに入れておきますが、語彙的には〈女ことば〉におおむね包摂されると言えるでしょう。

『〈役割語〉小辞典』(2014, viii-ix)

上記の二つの辞書の記述だけを見ても、性差を現わす指標には、人称詞、文末表現、感動詞、敬語、命令形、敬称などがあることが分かる。尾崎

(2004) は、日本語の男女差について以下のように述べている。

日本語の共通語は、カジュアルな話し言葉において話し手の男女差が語彙的に顕著に見られる言語である。その双璧とも言えるのは自称詞と文末形式であろう。

「日本語の男女差の現状と評価意識」『日本語学』、p. 48-55

以上の記述を踏まえ、主として人称詞と文末形式について見ていくことにする。

(2) 具体的な指標：人称詞と文末形式

A. 人称詞

人称詞として、以下の自称詞と対称詞を選んだ。

自称詞：わたし、あたし、わたくし、ほく、おれ

対称詞：あなた、きみ、おまえ

B. 文末形式

女性専用形式の文末形式に焦点を当てる。女性専用形式については、先行研究として、尾崎 (2011 [1997]) をはじめ、井出 (1979)、遠藤 (1989)、小林 (1993)、増田 (2016) など、数多くの先行研究がある。本稿では、尾崎 (2011 [1997]) に基づき、以下の二つの特徴から指標としての文末形式を選択した。

1. 終助詞「わ」の使用 (付加)
2. 終助詞「だ」の不使用 (削除)

このほかに、異なる系列の「かしら」も加え、女性専用文末形式として 11 の指標を選んだ。尾崎 (2011 [1997]) では、例えば、「(だ) よ」は、助動詞「だ」をつけるか否かの対立の意味で、「だ」を付けないのが女性専用とされる形式である。本稿では、便宜上、「(だ)ーよ」というように記載する。なお、調査の際には、参考として「男ことば」の「ぜ」と「ぞ」についても調べる。以下に指標とする文末形式を挙げる。

〈指標とする女性専用の文末形式〉

〈だ〉よ、〈だ〉ね、〈だ〉よね、わよ、わね、わよね、のよ、のね、のよね、
の（断定）、かしら

[参考] ぜ、ぞ

3. 調査方法

(1) 資料

調査資料は、文部省検定教科書、小学校国語科用（一年生）上巻である。現在、文部科学省の検定教科書として、小学校一年生で使用されているのは、以下の五つの出版社によるもので、各社上下2冊セットとなっている。本稿では、このうち、各社上巻計5冊を調査対象資料とした。

- a. 学校図書（2017）『みんなとまなぶ しょうがっこうこくご 一ねん上』
- b. 教育出版（2017）『ひろがることば しょうがくこくご 1上』
- c. 三省堂（2017）『しょうがくせいのこくご 一年—上』
- d. 東京書籍（2017）『新編 あたらしいこくご 一上』
- e. 光村図書（2017）『こくご 一上 かざぐるま』

(2) 調査方法

各教科書ごとに、2（2）A、Bで挙げた人称詞ならびに文末形式が、何回現れたかを全数調査した。各教科書には目次がついており、その目次にある單元ごとに順番に番号を振り、それぞれの単元内で、指標である人称詞や文末形式が何回出てきたかを調べ、表1にまとめた。教科書ごとに目次の作り方が異なるが、見出しになっているものはすべて單元として扱った。單元は、短いものは見開き2ページ程度、長いものは10～12ページの物語であった。

4. 調査結果

調査結果は、表1「教科書別の指標（人称詞、文末形式）の出現頻度」に示した通りである。紙幅の都合により、出現回数ゼロの指標は表1には記していない。

表1 教科書別の指標（人称詞、文末形式）の出現頻度

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

5. 考察

4. の調査結果をもとに、それぞれの指標が教科書でどのように扱われているかについて、考察を行う。表1を見ると分かるように、調査結果の値は非常に疎であり、「女ことば」を中心とした性別語の使用は非常に限られたものとなっていることがわかる。この理由については、考察の中で述べていく。

各教科書は、全体ページ数が約120～130ページ強で、絵や写真がふんだんに使われ、音声（音節と文字の関係、リズムなど）のほか、表記（文字の書き方、句読点の打ち方など）、文法（主語と述語の関係、基本的な助詞の用法など）に関して、丁寧な図解と説明があり、さらに読み書きでは、科学的な内容の文章、詩や物語などの文学的な文章など、ジャンルの異なる文章の読み方の違いが取り上げられ、敬体で書かれた文章にも徐々に慣れるように、内容の構成も細かな配慮がそれぞれにあり、非常に多くの内容が一冊の教科書に集約されている。

文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説 国語編』を見ると、学年ごとに「国語科の目標と内容」について詳細な解説があり、各学年の目標は、領域に対応し、「話すこと・聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」の3項目に分かれ、項目ごとに目標が記載されている。ここで、「話すこと・聞くこと」の項目の「第1学年及び第2学年」の記述を見ると、以下のようになっている。

相手に応じ、身近なことなどについて、事柄の順序を考えながら話す能力、大事なことを落とさないように聞く能力、話題に沿って話し合う能力を身に付けさせるとともに、進んで話したり聞いたりしようとする態度を育てる。

「第一節 国語科の目標」p. 15

この中の「相手に応じ」という部分には、性別語を含む役割語の運用も入ると考えられるが、児童にとって新しい小学校という公的な場では、幼児期の家族間、友達間という個人の関係から一歩進んで、目上の大人である先生とどのように話すか、他の複数の同級生たちの前でどのように話す

か、様々な人々との関係の中でどのように言葉を使って自分の考えを伝えるかということに焦点が当たっている。また、上述したように、「敬体で書かれた文章に慣れる」ことは、同指導要領の「各学年における言葉の特徴や決まりに関する事項」の第1学年及び第2学年の「言葉遣いに関する事項」(p. 30)にあり、文章表現においても、相手や場に応じた適切な言葉遣いを習得することが目指されている。

このように見てくると、規範としての国語の学習によって目指される言葉遣いは、男女ともに公的な場面で使えるものであり、性差のある表現、特に「女ことば」である女性専用の文末形式は、公的な場とは反対の私的な場面での言葉遣いということになる。その結果、教科書でも、文学的な文章の範疇と言える現代語の物語の女性の会話文に出現する(逆に言えば、そこでしか出現しない)と考えられるので、出現場所もかなり限られ、頻度が低くなるのは当然だと言えよう。その意味で、調査結果については、出現頻度そのものに焦点をおくというより、その出現の仕方に注目したいと考える。

以下、人称詞から順に考察を加える。

(1) 人称詞

ここでは、人称詞が性差を表す場面を取り上げる。特に「わたし」と「ほく」がペアとなって性差を対比によって明らかにしている場面の用例を挙げる。ただし、教育出版では、ペアでの出現までに、「女ことば」としての「わたし」が先に出ているので、その用例も挙げる。また、人称詞が使われている場面を理解するために、単に用例の文だけでなく、どのような場面でどのような絵とともに出現しているかも描写する。

(A) 自称詞としての人称詞：「わたし」と「ほく」

以下に教科書の用例を示す。ここで、「学：26-27」は「学校図書 p. 26-27に出現する」ことを指す。

a. 学校図書

第14単元「おはなしを よみましょう」の「いい もの みつけた」という話の中で、りすの家族（お母さんりすと子どもりす2匹）の会話に、「わたし」と「ほく」がペアで現れる。子どものりす2匹は、外見からは性別が不明であるが、会話の自称詞から男児と女児だと分かる。お母さんりすはエプロンをしている。

- ① 学・26-27 「わたし、たねを みつけたの。 ほく、どんぐりをひろったよ。
いい ものを みつけたわね。かあさんりすが いいました。」

b. 教育出版

第3単元「みんなの なまえ」で、「わたし」がまず現れる。場面は自己紹介で、「あらい えみ」という名前の紙を持った女児の絵がある。

- ② 教・11 「しりたいな みんなの なまえ しらせたいな わたしの なまえ」
「あらい えみさん はい」

第7単元「くまさんと ありさんの ごあいさつ」。この話は熊と蟻が道で会って挨拶をし、熊が、荷物を背負う蟻に対して「たいへんですね」と声をかけ、それに蟻が返答する場面である。

- ③ 教・30 ありさんは、「わたし、ちからもちなの。」と、こたえました。

蟻の絵からは性別はわからないが、この発話によって蟻が女性であることが分かる。

この教科書では、第12単元「ぶんをつくろう」で、女児と男児の絵とともに、「わたし」と「ほく」が初めてペアになって現れる。以下の2文が原稿用紙のマス目の中に書かれている。書きことばとしての扱いである。

- ④ 教・52 「わたしは、はをみがきました。」「ほくは、ゆうえんちへいきます。」

c. 三省堂

序に当たる部分の第4単元に、教室で男児2人と女児2人が自分の名前を紙に書き、先生の前で一人ずつ自己紹介をしている絵がある。そこに文はなく、単元の題目として、「わたしの なまえ」がある。この「わたし」

は、単元名であることから、上記の2冊の教科書に現れたような会話文の中での「わたし」と違って、「ぼく」と「わたし」の双方を包含する中立的な意味の「わたし」だと考えられる。

第8単元で初めて「わたし」と「ぼく」がペアになった会話文が登場する。

- ⑤ 三・18-19「ぼくは、ねこが すきなんだ。ななさんは、なにが すきな。」
「わたしは、きりんが すき。このまえ、どうぶつえんで みたんだよ。」

なお、この単元名は「わたしの すきな もの」で、この単元名に入っている「わたし」は、第4単元の「わたしの なまえ」と同様、中立的な意味の「わたし」だと考えられる。

d. 東京書籍

第3単元「よろしくね」の自己紹介の場面で、「わたし」と「ぼく」がペアで現れる。女兒と男児の絵から、以下の文を発話していることが分かる。

- ⑥ 東・10-11「わたしは かわの ゆみ です。」
「ぼくの なまえは もり けんた です。」

e. 光村図書

最初のページの第1単元の詩「あさ」の中に、「ぼく」と「わたし」がペアで現れる。

- ⑦ 光・1 「…(略)… ぼくも わたしも せんせいも つながる つながる まるくなる みんな なかよし いちねんせい」

「ぼく」という語については、金水(2014)が述べるように「男ことば」であると同時に「少年語」である。「ぼく」と対になる性別語としては「あたし」が考えられるが、教科書には出てこない。「あたし」については、金水編(2014)に以下の説明がある。

男女ともに用いる一人称代名詞。「わたくし」が音変化してできたもの。明治時代から文献に現れる。「わたくし」が丁寧な表現であるのに対し、くだけた、俗語的な印象がある。

『〈役割語〉小辞典』(2014, p. 8)

つまり、規範としての国語では、俗語的な印象がある「あたし」は避けられていると考えられる。また、「わたくし」は丁寧ではあるが、「ほく」とペアにするには文体レベルに差があり、選ばれていない。そこで、「あたし」と「わたくし」の間にある「わたし」が「女ことば」としての役割を担っていると言えよう。

以上、見てきたように、小学1年生の教科書では、「わたし」と「ほく」が一对のペアとして登場することが多く、対比的な扱いによって、明確に性差を現わす性別語として機能している。ペアで現れている個所については、教育出版の1冊だけが会話文としてではなく、書きことばとしての出現になっているが、それ以前の単元の会話文の中で、「女ことば」としての「わたし」が提示されている。したがって、5冊とも、「わたし」と「ほく」の2語は、対比的な提示方法で性別語として扱われていると言える。

一つ注目されるのは、中立的な意味の「わたし」の扱いである。表1では、「*」をつけてある。この中立的な意味の「わたし」を提示しているのは5冊中3冊（学校図書、教育出版、三省堂）で、そのうち、三省堂だけは第4単元という非常に早い段階で出現しており、「女ことば」の「わたし」より早い出現となっている。他の2冊は「女ことば」の「わたし」の方が早い出現となっている。東京書籍と光村図書には、中立的な意味の「わたし」は出現していない。

学校図書の第25単元で、中立的な意味の「わたし」が7回出現しているのは、なぞなぞの文の中で、「わたしは、だれでしょう。わたしは、とびます。わたしは、こうえんへいきます。」のように用いられ、書きことばとして助詞の練習にも使われている文なので、出現回数が多くなっている。三省堂第17単元で、「女ことば」の「わたし」が5回出現しているのは、ちびまるこが会話しながら、家族の名称を紹介しているためで、「わたしは、おねえちゃんからみると、いもうと。」のような言い方が続き、出現回数が増えている。東京書籍の付録の14回の出現回数は、女兒が主

人公となった物語で、「女ことば」の「わたし」が頻出しているためである。

まとめると、小学校1年生の教科書では、「わたし」と「ぼく」は、一対のペアとなる性別語として登場し、「ぼく」は少年語で、「わたし」は少女語としての位置づけにあると言える。多くの場合、女兒と男児の絵がつき、話しことばを明示する吹き出しの中に入って現れている。一方、「ぼく」も「わたし」も包含する中立的な意味の「わたし」は、話しことばの吹き出しの中には現れず、単元名や本文のト書きの部分に出現している。児童は、文字だけでなく、教科書の挿絵、教室での教師の指導によって理解をしていくので、「女ことば」の「わたし」と、中立的な意味の「わたし」について、最初は区別ができなくても、学習過程で徐々に理解が進むのであろう。敬体の文章に現れる「わたし」につながる学習過程であり、話しことばから書きことばへの移行への布石だと考えられる。

ここで、就学以前の幼児の自称詞の使い分けに関する西川（2003）の研究に少し触れておきたい。

西川（2003）は、保育園における216家庭に対するアンケート調査と観察調査を通じて、興味深い結果を報告している。2歳ではほとんどの子どもが対称詞と同じ自称詞（愛称・名前）を用い、その後、男児は「愛称・名前」と「おれ」「ぼく」を並行して使い、幼児期には両親に「愛称・名前」、友達に「おれ」を用いるという傾向があるという。一方、女兒は学童期になって「わたし」の使用が増加し始めるものの、「愛称・名前」の使用が学童期にも続き、両親と友達の間での使い分けはほとんど見られなかったと述べている。西川（2003）では、男児について、就学前（6歳まで）と就学後（7歳以降）に2分して χ^2 乗検定を行い、就学後に加齢とともに「おれ」を使用せず、「ぼく」のみを使用する子どもが有意に増加することを明らかにしている。つまり、就学以降、明らかに「ぼく」の使用が増加し、「おれ」の使用が減るということである。そこには学校教育における規範としての国語の教育も影響しているのではないかとと思われる。その理由は、女兒に

も「わたし」の使用の増加が(有意差ではないが)認められることから、児童にとって、就学が言語環境の大きな変化につながっていると理解されるからである。また、西川(2003)の指摘のように、男児は就学前には既に「愛称・名前」と「おれ」を使い分けているという事実から、就学後に、国語教科書をはじめ、学校生活のいろいろな場面で、少女語の「わたし」と対比的に出てくる少年語の自称詞「ぼく」が、学校や教室という公的な場で使える語だと完全に理解すると考えられる。学童期という社会性の獲得過程の中で、幼児期には仲間に対して自己主張や自慢をする時に、親に対しては反発や怒りを表す時に使っていた「おれ」を、非常に私的な領域でだけ使用するようになり、言い換えれば、主として友達関係における使用に限定するようになるために、「おれ」の使用が減少すると理解することもできるのではないだろうか。一方、女兒は、男児のように自称詞の使い分けが明確ではなく、2歳児から両親・友達双方に「愛称・名前」を使用するようになり、かなり長い間「愛称・名前」を自称詞として使い続け、最終的に「わたし」を使うようになるという。そこには、先に述べたように、自称詞「わたし」の機能が、少女語だけではなく、中立的な意味を持ち、広く男女ともに使える自称詞であること、また、大人が正式な場面で使う自称詞であることなど、女兒が生活体験の中で「わたし」の持つ多様な機能に触れることが、逆に「わたし」の使用を難しくしているのかもしれない。「わたし」が持つ多機能性は、男児にとっての「ぼく」よりはるかに複雑であり、その意味で、女兒にとって「わたし」は使いにくい自称詞だと考えられる。

このように、男児と女兒では性差はあるものの、幼児は就学前に自称詞の用法をかなりの程度身につけていることから、規範としての国語教育では、公的な場で正しく自称詞を使えるようにするという目的で、「わたし」と「ぼく」が対比的に出現し、その使用が促されていると考えられる。さらに、日本語の会話では自称詞が省略されることが多いため、自然な流れ

として自称詞の出現頻度も多くないのだと考えられる。

ここで、大学での日本語教育について考えてみると、留学生の場合、学習では文字に頼ることが多いこともあり、上記の差異については説明が必要だと言えよう。漫画やアニメの普及によって、「少女語」の「あたし」が「少年語」の「ぼく」と対立することを知っている留学生は増えていると思われるが、日本語教科書の敬体の場面に現れる「わたし」が、少女語としての機能を持ち合わせることはあまり意識されていないのではないだろうか。

また、小林 (2016) では、男性使用の「わたし」の目立つ点として、丁寧体と共起する割合が「ぼく」「おれ」、また女性の「わたし」「あたし」と比べても高く、場所柄や相手の性別、談話の種別にかかわらず、年上の相手に対する比較的フォーマルな場面でよく使われていることが指摘されている。このように、性別語としていろいろな機能を持つ「わたし」について、大学の日本語教育の現場でも、研究成果に基づいた体系的な説明が必要だと考えられる。

次に対称詞について見ていく。

(B) 対称詞としての人称詞：あなた、きみ、おまえ

a. 学校図書

「あなた、きみ」の出現は無い。

「おまえ」は資料編の中の話に出てくる。ねずみの家族の会話で、父親ねずみが子どもねずみに話しかける場面である。

⑧ 学・109「おまえ、いい もの ひろって きたね。」

この発話に続いて母親ねずみが子どもねずみに話しかけているが、子どもねずみの名前も対称詞も用いられていない。

⑨ 学・109「これは、せっけんと いう ものですよ。」

b. 教育出版 「あなた、きみ、おまえ」の出現は無い。

c. 三省堂 「あなた、きみ、おまえ」の出現は無い。

d. 東京書籍

「おまえ」の出現は無い。

「きみ」は、ねずみともぐらの会話の中に出てくる。もぐらが引っ越しの挨拶にねずみの家を訪ねた場面で使われている。

- ⑩ 東・35「きみの いえの したに、ひっこして きた もぐらです。よろしくね。」

絵では、ねずみは青色の上着に濃い茶色の長いズボンをはき、もぐらはサスペンダー付きの黄緑の長いズボンをはいている。服装からは性別ははっきりとわからないが、この会話文で、もぐらがねずみに「きみ」を用いていることから、もぐら自身は男性だと推定される。ここで「きみ」と呼ばれたねずみの性別は、もし、日本人の子どもたちに聞けば、やはり男性だと判断されるのではないだろうか。

このほか、「きみ」は最後の付録に、人称詞の一つとして挙げられ、そこでは「あなた」も出てきている。

- ⑪ 「東・133 (付録「ことばの せかい」の中の「ことばの ひろば」) 「…(略) …せんせい わたし ぼく あなた きみ みなさん みんなともだち…」

本稿は横書きなので、語の並びの効果が見えないが、教科書(縦書き)では二段組のページの下段に、「せんせい」がまず一語で右端の第一行目に記されている。その左横の行に「わたし ぼく」というように縦に記され、更にその左の行の同じ位置に「あなた きみ」が縦に記されている。この語の並びを見ると、「わたし」に「あなた」が対応し、「ぼく」に「きみ」が対応すると読める。なお、「あなた」は付録のみに現れ、単元の中の本文には出現していない。

e. 光村図書 「あなた、きみ、おまえ」の出現は無い。

以上、対称詞としての人称詞があまり出現していないのは、日本語では会話の際に対称詞としての人称詞を使わなくても会話が成立すること、学校

という場で、規範として提示するような対称詞としての人称詞がないということも理由であろう。

油井（2007）は、先行研究に基づき、対称詞を「人称名詞」、「定記述」、「固有名詞」の三つに整理している。実際、教科書内では、上記の「人称名詞」（本稿では「人称詞」）以外に以下のような例が見られた。

「定記述」の例：

三・48（男児）「せんせい、こうえんで、ともだちとなわとびをしました。
たなべ ひかる」

三・49（女児）「おかあさん、きのう、こうていで、とりのすをみつけたよ。
ほしの あおい」

「固有名詞」の例：

学・34（女児）「ゆりなさんの とくいな ことは、なんですか。」

学・35（女児）「そうたさんの たからものは、なんですか。」

手紙形式では、女児の名前に「ちゃん」を付けた形も登場している。

学・60 「もえちゃんへ …（略）… あやかより」

三・70 「えりちゃんへ …（略）… はるかより」

大学における日本語教育では、「あなた」は、日本語未習者対象の初級レベルの初日の授業で扱いに苦慮する語彙であるが、今回の調査では、「あなた」は5冊中1冊に出現するのみで、しかも、付録の語彙リスト中という扱われ方であった。対称詞である人称詞「あなた」は、初等教育でも扱いが難しいと推測できる。

（2）文末形式

女性専用文末形式として選択した11指標のうち、出現したのは、「(だ)よ」、「(だ)ね」、「わね」、「のね」、「の（断定）」、「かしら」の6形式で、それ以外の「(だ)よね」、「わよ」、「わよね」、「のよ」、「のよね」の5形式は出現していなかった。

尾崎（2011）は、「わ」の使用について、現在でも女性専用の形式で、おそらく衰退に向かっているものと思われるが、データからは一貫した明確な年齢差が認めにくいこと、「わね」の場合はむしろ若年層に向かって増加

しているようでさえあると述べている。今回の調査でも、「わ」が付加された文末形式で出現したのは、「わね」のみであった。

以下、教科書別に指標の出現例を見ていく。

a. 学校図書

「の（断定）」1例、「わね」1例、「だ」の不使用形「ね（え）」1例の合計3例が出現している。

(1) (A) a. で取り上げた会話例①に出現する。

⑫ 学・26 「わたし、たねを みつけたの。 ぼく、どんぐりをひろったよ。」
女性専用文末形式「の（断定）」は、性差が明確な自称詞と共起し、「わたし、…の。ぼく、…よ。」という対比の中で、少女語の「わたし」が「の（断定）」を使っている。

次の「わね」も、上記と同じ会話例①に出てくる。

⑬ 学・27 「いい ものを みつけたわね。かあさんですが いいました。」
「わね」は、お母さんりすの発話に現れ、性差と同時に年齢差も示していると考えられる。「わね」は、学校図書ではこの1例のみであった。

次は、「だ」の不使用形である。(1) (B) で挙げた資料編のねずみの家族の会話の中で、母親ねずみが、父親ねずみと子どもねずみに話しかける場面である。石鹸を使って顔と手を洗い、いい匂いになった後での発話である。

⑭ 学・111 「みんな、しろい ばらの はなに なったみたいねえ。」
文末は「ね」が「ねえ」になった形で、「だ」が省略された女性専用の文末形式である。これも⑬の母親りすと同様、母親ねずみが「女ことば」を話しているという構図である。これも、母親という役割と同時に、年齢差も示していると考えられる。

b. 教育出版

「の（断定）」の1例のみが出現していた。

(1) (A) b. ③の発話である。「女ことば」の「わたし」と「の(断定)」が共に起している。この発話によって、この蟻は女性だと分かる。

⑮ 教・30 「わたし、ちからもちなの。」

c. 三省堂

「かしら」が1例出現している。

第20単元「おはなしを たのしもう」の「どうぞの いす」という話の中に出てくる。この話は、うさぎが作った小さな椅子をめぐる物語で、登場するのは動物だけである。ろばが自分のどんぐりの籠を小さな椅子に載せ、昼寝をしている間に、椅子に載せた食べ物が他の動物によって次々に入れ替わる。そして最後に、目を覚ましたろばが、自分の籠の中にどんぐりではなく栗が入っているのを見て驚くのである。

⑯ 三・58「あれれ。どんぐりって、くりの あかちゃんだったかしら。」

これは、物語の最後の発話で、いわばオチに当たる部分であるが、読者はここで初めて、ろばが女性だと気づくのである。動物の世界の話なので、性別は物語には関係ないと言えるが、発話の文末形式が「かな」ではなく、女性専用形式の「かしら」だということで、逆に性別意識が出てきたように筆者には感じられた。

d. 東京書籍

「だ」の不使用による女性形式「~~(だ)~~ね」「~~(だ)~~よ」が2例ずつ、「わね」が1例、「のね」が1例、「の(断定)」が1例出現している。

まず、第28単元の物語に、「~~(だ)~~ね」「~~(だ)~~よ」が1例ずつ出現する。これは、「かいがら」という熊の子と兎の子が主人公の物語で約6ページにわたる。絵では、熊の子はオレンジ色のTシャツに青い半ズボンを着て青い靴、兎の子は水玉模様のワンピースに赤い靴で、一見して兎の子が女児だと分かる。会話部分のみ抜粋する。

東・100(熊)「うみで かいがらを ひろって きたよ。」

⑪東・100(兎)「きれいね。みんな、ちがう いろ。」←(だ)ね:「だ」の不使用

東・100(熊)「うさぎちゃん、どれが すき。」

⑫東・100(兎)「これよ。これが いちばん すき。」←(だ)よ:「だ」の不使用

尾崎(2011〔1997〕)は、「だ」の不使用について、男性も実際に使っているという点から、カテゴリカルな女性専用形式ではなく傾向的な性差だとしつつも、男性の使用率がかなり低いことから、なかばカテゴリカルな性差だとも言えるとも述べている。また、女性の間では、まだまだ普通に使われているが、特に30代以下の世代においては衰退に向かっていると指摘している。

増田(2016)は、尾崎(2011〔1997〕)を踏まえ、2016年現在の状況として、「だ」を使用する方向への変化がさらに進んだと考えられると述べ、年齢別では、「だ」の不使用は50代以上で多いが、40代以下では、「だ」の使用が優勢で、尾崎(2011〔1997〕)の指摘した30代以下の衰退傾向はより一層顕著となり、40代にもその傾向が見られるようになっていると指摘している。

第28単元「かいがら」の熊の子と兎の子の会話は、性別語の特徴がよく出ている会話だと考えられるが、増田(2016)を踏まえれば、⑪の「きれいね。」という発話も、30代以下では「きれいだね。」が普通になっている可能性がある。ただ、⑫の発話については、女兒である兎の子が「これだよ。これが いちばん すきだ。」と、「だ」が使用されるかは疑問の余地がある。

次は、付録の中の物語の例で、「(だ)ね」、「(だ)よ」、「わね」、「のね」、「の(断定)」がそれぞれ1例ずつ出現している。第28単元と異なり、付録の位置づけなので、時間の余裕があるときに教室で扱われる単元だと考えられる。

付録第30単元「ことばの せかい」の「わたしの かさは そらの いろ」は、10ページにわたる、小学1年生用の教科書にしては長い物語で、

主人公の女兒と母親の会話の後、女兒の空想世界が展開され、小動物や友達達が皆、女兒の傘の中に入りに来るという設定である。以下に該当箇所を含む会話部分を抜粋する。

東・112「こんどは なくさないでね。」おかあさんがいいました。
(店員が奨めた傘について、おかあさんが、)

①東・113 (母)「これ、かわいいわね。これは、どう。」

②東・113 (女兒)「あおが すきなの。

だって、はれた ひの そらの いろよ。」 ← (~~だ~~)よ

③東・113 (母)「そう いえ、そうねえ。」 ←「(~~だ~~)ね」

(…(略) …その後、女兒は青い傘がずんずん広がっていたことに対してつぶやいて言う)

④東・118 (女兒)「この かさは やっぱり あおぞらなのね。」 ← (~~だ~~)ね

この付録の物語「わたしの かさは そらの いろ」は、母親と女兒の会話が多いこともあり、「女ことば」が多く現れている。ここでも、母親は「わね」を用いていて、年齢差も同時に示されている。「だ」の不使用は、母親、女兒どちらの発話にも見られる。

以上、東京書籍の教科書に、「女ことば」が他の教科書より多く出現しているのは、比較的長めの現代の物語の文章が2本あり、女兒と母親の発話が他の単元に比べて多かったことによる。

e. 光村図書

光村図書には、11の文末形式の指標は出現していなかった。

最後に、参考として調べた「ぜ」と「ぞ」について触れておく。

「ぜ」は、金水編(2014)『〈役割語〉小辞典』にあるように、主に男性が用いる「男ことば」で、「同様の意味を持つ「ぞ」「よ」に比べて、俗っぽく、粹な、あるいは柄の悪い印象がある。」と言われるように、規範としての国語としては適さないと考えられ、5冊すべてで出現していなかった。

「ぞ」は、金水編(2014)では、「発話者に威厳や強い指揮権、男性性を印象づける言葉」とされ、「同様の意味を持つ終助詞「ぜ」「よ」に比べ、聞き

手に対する強制力が強い。男性語的性格を持つが、集団を統率する人物や気性が強く頼りがいのある人物など、女性も用いる（〈男ことば〉〈権力者語〉）」と記されている。「ぞ」は2回出現している。

一つは、「のばす おん」の単元で「ゆうれい」という短い文章の中に現れる。

㉓ 学・40 「まっくら ていでん こわいぞう」

もう一つは、「おはなしを たのしみましょう」という単元の「たぬきのじてんしゃ」という物語の中で、主人公のたぬきの子をばかにするカラスがからかっている発話の中に現れる。

㉔ 学・43 「やあい、たぬきの くいしんぼ。じぶんの しっぽを たべてるぞ。」

2 例とも学校図書の例で、それ以外の教科書には出現していない。

以上、5冊に現れた文末形式を見てきたが、既に述べた当初の予想のように、女性形式の表現の調査結果は、出現頻度も少なく、出現する場合は、現代の物語の会話文に集中して現れていた。これまで見てきたように、文末形式の出現の仕方から、以下の二つの傾向が読み取れる。

1. 終助詞「わ」は衰退傾向にあると言われるが、規範としての国語の学習を目標とする教科書では、文末形式「わね」は、母親の役割語として、母親の発話に現れ、年齢差も同時に示している（㉓と㉔）。このように、母親という役割が、「女ことば」の使用によって象徴されていると考えられる。

この「母親の役割」とは何かを考える時、母親の発話だけではなく、父親の発話と対比することによって、その役割が一層明らかになると考えられる。

まず、以下の例を見てみよう。これは、東京書籍の第20単元「こんなこと したよ」の中の例である。家の人に知らせたいことを書くという練

習で、書いた後にそれを家の人に見せて読んでもらうという場面が想定されている。母親と父親がそれぞれ発話している。

東・69 (母親)「げんきに おにごっこを して いる ことが よく 分かるよ。」

東・69 (父親)「みんなで うたうのは たのしそうだね。」

この二つの例では、母親も父親も常体形での発話となっていて、児童にとって、実際の家族の発話に近いものだと考えられる。ここでは、父親も母親も対等に児童に接している様子がうかがわれる。

次の例は、学校図書の資料編の物語で、父親と母親の発話だが、設定はねずみの家族である。これは、既に人称詞「おまえ」の例で引いた⑧と⑨の発話である。

父親ねずみが、石鹸を拾ってきた子どもねずみをほめ、母親ねずみがそれを受けて、子どもねずみにそれが何であるかを教える場面である。

学・109 (父親ねずみ)「おまえ、いい もの ひろって きたね。」

(母親ねずみ)「これは、せっけんという ものですよ。」

父親ねずみの発話は、「おまえ」という目下への対称詞と常体形を使っているのに対して、母親ねずみは、子どもに対して敬体を使って発話をしている。挿絵には、眼鏡をかけてあぐらをかき、じつと石鹸の香りを楽しむ穏やかな父親ねずみと、両手を右頬のところで合わせて体をしなわせ、目をつむって石鹸の香りを感じているやさしそうな母親ねずみ、それに石鹸の近くで腹ばいになって石鹸の香りを楽しむ子ねずみの3匹がいる。絵と発話の形式から、このねずみの家族は、父親が中心となる家族ではないかと想像されるのである。仮に、母親ねずみの発話を敬体ではなく、常体に直すと、「これは、せっけんというものよ。」となる。常体の発話になると、丁寧さが失われ、父親と母親の関係がより対等に感じられるのではないだろうか。ある意味、現実感が出てきて、幻想的なイメージは壊されるとも言えよう。ちなみに、この物語は「月よに」という題目で、最後は「三び

きの ねずみは、とても しあわせな きもちに なって、うっとりと、まどの 月を ながめました。」という文で終わる。最後の母親の発話は、⑭の例で取り上げた「みんな、しろい ばらの はなに なったみたいねえ。」で、文末形式は、「だ」の不使用の「女ことば」になっている。このねずみ一家は、幸福な家族像として描かれているが、その中での母親の役割は、常体発話の父親の前で、石鹸を知らない子どもに対して、敬体発話によって、先生のように子どもに教える教育的な母親のイメージ、そして、それは同時に、父親の前でも、丁寧さを失わない母親のイメージも作っていると筆者には感じられるのである。このイメージは、家族に対する敬体の使用と、女性文末形式の「女ことば」の使用によって描かれていると言えるだろう。

2.「だ」の使用の増加が、国語教科書の女兒の発話にも反映されている。

尾崎（2004）では、文末形式を中心に言葉の男女差が縮小しつつあることが示され、その理由として、女性が女性専用形式を使わなくなることによって起きているということが明らかにされている。「だ」の使用の増加もその流れの上にあり、今回の調査対象の小学校国語教科書でも、「だ」の不使用が少ないことによって、同様の傾向が確認されたと言える。「だ」の使用・不使用については、尾崎（2011〔1997〕）、増田（2016）に詳しいが、今回の調査中に、50代の筆者が、女兒がここで「だ」を入れるのか、と感じる例がいくつかあった。その一つの例を以下に挙げる。

光村図書第32単元「おはなしを たのしもう」の「ゆうやけ」という話は、狐の子、熊の子、兎の子の3匹の友達の話で、その会話の中に現れる。3匹の絵は、熊の子はつなぎ風の青いズボン、兎の子は黄色地に花柄のワンピース、狐の子は新しいサスペンダー付きのズボンである。物語は、新しい赤いズボンをはいた狐の子が、友達に気づいてほしいと思いつつ、友達の子と兎の子と一緒に遊んでいるうちに新しいズボンのこ

とを忘れてしまい、夕方になって、友達二匹が夕焼けを見て、その真っ赤な色から、狐の子の新しいズボンに気づくという話である。

光・108 (A)「そらが まっかだね。」

光・108 (B)「きつねくんの ズボンの いろだね。」

くまの こと、うさぎの こが、きつねの この ほうを みました。そして、

光・108 (C)「あ、 その ズボン。」

光・108 (D)「あたらしい ズボンだね。」

くちぐちに こえを あげました。

ここでは、それぞれの服装から、熊の子と狐の子が男児で、兎の子が女児だと分かる。上記会話の (A) (B) (C) (D) の各発話者が誰かについては、(A) (B) は、ト書き部分に出てくる熊の子と兎の子の順番を考えると、(A) は熊の子 (男児) で、(B) は兎の子 (女児) だと推測される。しかし、(C) (D) は、ト書き部分に「くちぐちに」とあるだけなので、文末形式だけを見て、発話が熊の子か兎の子かは判断できない。(B) と (D) が兎の子 (女児) の発話だとすると、筆者には、この「だね」に男性的な印象が感じられるのである。対立形式としては、「きつねくんの ズボンの いろね。」「あたらしい ズボンね。」が考えられるが、教科書では「だ」が入っているのである。

増田 (2016) は、「だ」の使用のタイプについて、40 代と 50 代では傾向に違いが見られ、40 代以下では「だ」の使用専用タイプが多くみられるが、50 代以上では少なく、「だ」の使用・不使用が混じる混用、あるいは一貫して「だ」を使わない不使用タイプが中心であると指摘している。つまり、50 代の筆者は、「だ」の不使用タイプで、教科書の用例に違和感を覚えたのだと考えられる。このように自分自身が、性別語使用において、どの年代のどのグループに入るかを意識しないと、児童生徒の言葉遣いに対して、無意識に誤った価値判断をする危険性があるということである。

5. おわりに

本稿では、「女ことば」をはじめとする性別語が、規範としての国語を学ぶ出発点である、初等教育の最初の段階でどのように現れるかに関心を持ち、小学校一年生用の教科書を資料とし、主として人称詞と文末形式の中から11の指標を選択し、出現頻度を調べた。出現頻度自体が少なかったため、指標の出現の仕方を分析、考察した結果、自称詞としての「わたし」は、少年語である「はく」とペアとなる少女語としての役割が大きく、しばしば対比的に出現していること、また、男児、女児ともに使える中立的な意味での自称詞「わたし」の機能が教科書内には混在している場合があることがわかった。文末形式については、既に尾崎（2004）で男女差の縮小傾向が明らかにされ、増田（2016）でさらにその傾向が進んでいることが指摘されているが、実際にこの調査を通じて、女兒の発話に「だ」の使用が多いことが確認できた。また、終助詞「わ」は衰退傾向にあると言われるが、母親の役割語として出現していること、母親の役割が「女ことば」によって象徴されている例が見られることも確かめられた。

中村（2012）をはじめとする「女ことば」の歴史を踏まえ、現在の日本語の「女ことば」、広くは性別語を、規範という観点から改めて考えることは、大学における日本語教育においても、新しい示唆を得るきっかけになると期待される。今後の課題としては、人称詞、文末形式以外にも、性差を現わす指標（感動詞、敬語、命令形、敬称）について調査を行い、次の段階として各指標同士の関係を明らかにしていくことが重要だと考えられる。

注

- 1) 外国人留学生を主な対象とした放送大学教材『日本語Ⅱ―外国語としての―』（2003）を指す。『昔話／ミニドラマ』の中の「会話」（丁寧体と常体）の項目で、男女の性差を扱った。この会話部分は、後に姫野ほか編著（2005）『日本語中級からのスキルバランス』（凡人社）として刊行された。

調査資料（アイウエオ順）

- 1 学校図書 『みんなとまなぶ しょうがっこう こくご 一ねん上』平成 29 年 2 月 10 日発行
- 2 教育出版 『ひろがることば しょうがくこくご 1 上』平成 29 年 1 月 20 日発行
- 3 三省堂 『しょうがくせいのこくご 一年—上』2017 年 2 月 25 日発行
- 4 東京書籍 『新編 あたらしいこくご 一上』平成 29 年 2 月 10 日発行
- 5 光村図書 『こくご 一上 かざぐるま』平成 29 年 2 月 5 日発行
- * 発行日の記載方法については、三省堂は横書きのため西暦。他の 4 冊は縦書きで漢数字であるが、本稿が横書きのため、数字のみ算用数字に変更した。

参考文献

- 1 井出祥子 (1979) 『女のことば 男のことば』日本経済新聞社
- 2 遠藤織枝 (1989) 「応答詞と終助詞からわかること」現代日本語研究会編『ことば』10
- 3 小林美恵子 (1993) 「世代と女性語—若い世代のことばの「中性化」について—」『日本語学』12-6
- 4 尾崎喜光 (1997) 「女性専用の文末形式のいま」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房, 33-58
- 5 西川由紀子 (2003) 「子どもの自称詞の使い分け: 「オレ」という自称詞に着目して」『発達心理学研究』14-1, 25-38
- 6 尾崎喜光 (2004) 「日本語の男女差の現状と評価意識」『日本語学』23, 7, 48-55
- 7 油井恵 (2007) 「日本語および英語における対称詞の機能: ポライテネスとの関連性」駿河台大学論叢 33, 19-30
- 8 尾崎与喜光 (2011) 「女性専用の文末形式のいま」現代日本語研究会編『合本 女性のことば・男性のことば (職場編)』ひつじ書房, 33-58
- 9 中村桃子 (2012) 『女ことばと日本語』岩波新書
- 10 増田祥子 (2016) 「女性文末形式の使用の現在」現代日本語研究会遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編『談話資料日常生活のことば』ひつじ書房, 131-154
- 11 小林美恵子 (2016) 「「日常生活」における自称詞」現代日本語研究会遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編『談話資料日常生活のことば』ひつじ書房, 41-72
- 12 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領解説 国語編』

〈辞典類〉

- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』東京堂出版
 金水敏編 (2014) 『〈役割語〉小辞典』研究社